

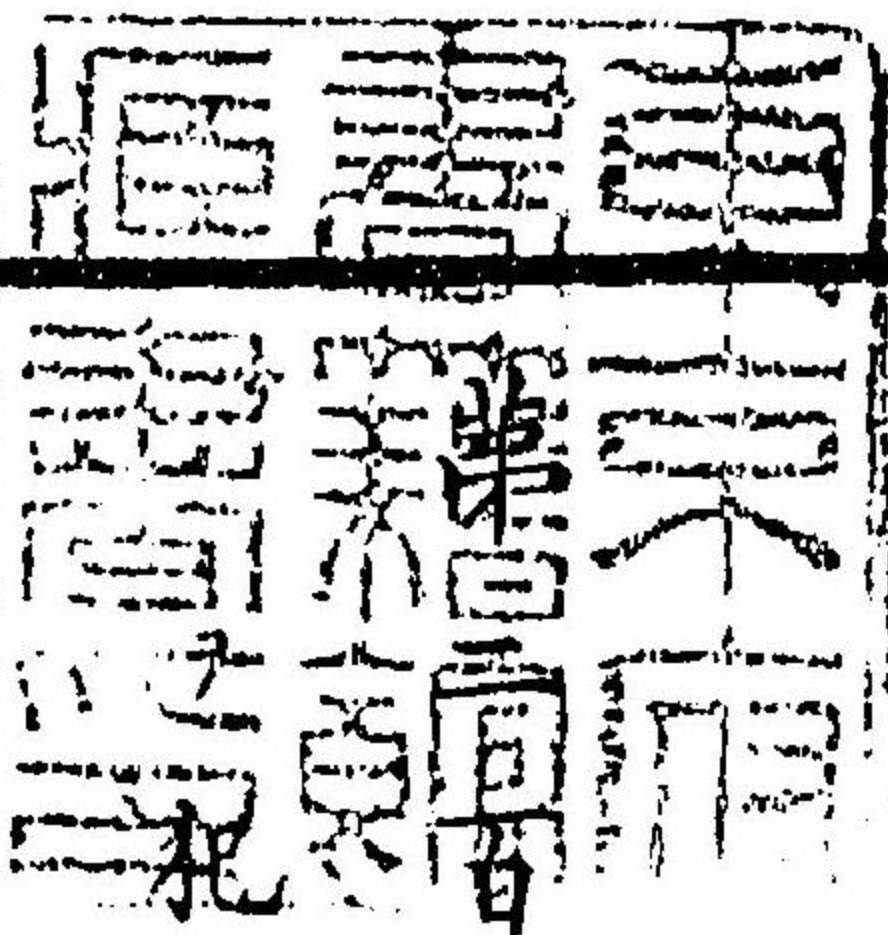
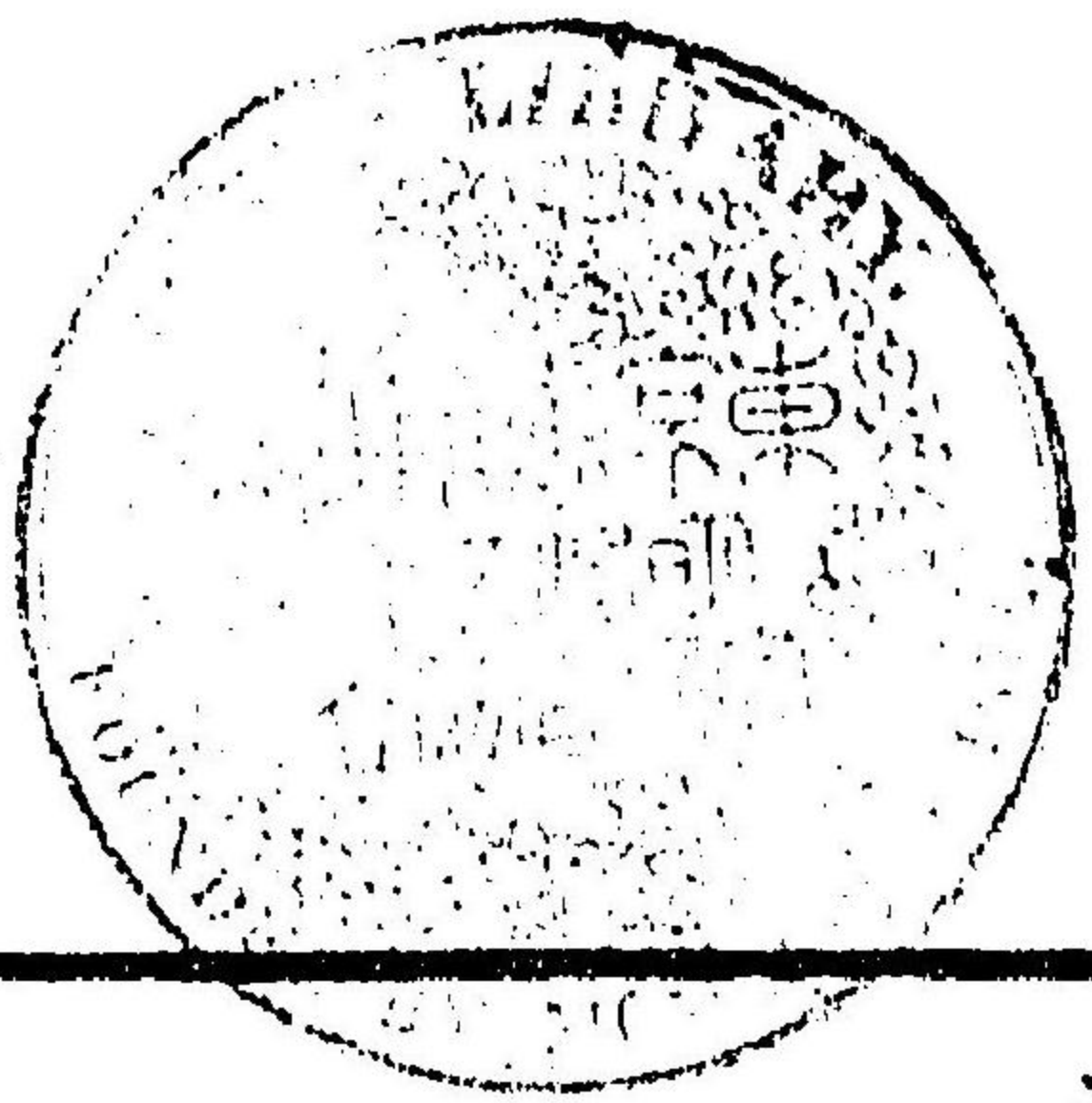
官佛蘭西
法律書
治罪法
三

CF2
3
07

館書圖京東	
函 四 一	門 新
架 二	部 一 一
號八九九四	類

共五本

CF2
3
07



佛蘭西
法律書
治罪法第三

明治九年文部省交付

權大内史箕作麟祥 譯

○第三章 重罪裁判所ニテ為ス所ノ手
續

九十一條 重罪取調局ニテ被告人重罪
レタリト告ルヲ言渡シタル時控訴院
所在ノ地ニ重罪裁判所ヲ設ケサルニ於テハ
檢事長ノ命ニテ二十四時間ニ總テ訴ニ管ス

ル書類ヲ州ノ首府ニアル初告裁判所ノ書記
 局即チ重罪裁判所ノ書記局ニ送り又ハ別段指
 示シタル初告裁判所ノ書記局前同ニ之ヲ送ル
 可シ
 如何ナル場合ニ於テモ下吟味ヲ為シタル裁
 判所ノ書記局ニ遺レ置キ又ハ控訴院ノ書記
 局ニ差出シタル犯罪ノ證書類ヲ同一ノ期限
 内二十四時ニ前項ニ記シタル書記局ニ送ル
 可シ

第二百九十二條 前條ニ記シタル二十四時ノ

期限ハ被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス可キ重罪
 取調局ノ言渡書即チ重罪ヲ犯レタリヲ被告
 人ニ送りタル時ヨリ之ヲ算フ可シ
 被告人既ニ留置場ニ入りタル時ハ右二十四
 時ノ期限内ニ重罪裁判所附ノ留置場ニ其被
 告人ヲ移ス可シ

第二百九十三條 書記局ニ書類ヲ送り且被告
 人ヲ重罪裁判所附ノ留置場ニ移レタル時ヨ
 リ遅クトモ二十四時間ニ重罪裁判所ノ上席
 人又ハ上席人ヨリ別段任ヲ受ケタル裁判役

其被告人ヲ問糺ス可シ
 第二百九十四條 被告人ハ自己ノ為メ辯論ス
 可キ代言人ヲ撰ミタルヤ否ノ問ヲ受ケ若レ
 之ヲ撰マサル時ハ裁判役直チニ代言人一名
 ヲ撰ム可シ但シ代言人ヲ撰ムトナクシテ為
 シタル諸件ハ其効ナカル可シ
 然レモ被告人後ニ自カラ代言人ヲ撰ミタル
 時ハ裁判役ノ為シタル代言人ノ撰用ヲ取消
 ス可シ但シ此場合ニ於テハ裁判役ノ為シタ
 ル代言人ノ撰用ヲ取消スト雖モ其撰用ヲ得

タル代言人ノ為セシ諸件ハ取消ス可カラス
 第二百九十五條 被告人ノ代言人ハ本人自カ
 ラ撰用スルト裁判役ノ撰用スルトヲ問ハス
 控訴院又ハ其管轄地内ノ代言人若クハ代書
 師ヲ用フ可シ但レ被告人重罪裁判所ノ上席
 人ヨリ已レノ親族又ハ朋友中ノ一人ヲ代言
 人ト為ス可キ允許ヲ得タル時ハ格別ナリト
 ス

第二百九十六條 重罪裁判所ノ上席人又ハ上
 席人ヨリ別段任セラレタル裁判役ハ被告人

ニ若シ重罪取調局ノ言渡ノ取消ヲ願ハント
 欲セハ五日内ニ其旨ヲ届出ツ可ク若シ其期
 限内ニ之ヲ届出テサル時ハ其取消ヲ願フ可
 キノ權ヲ失フ可キ旨ヲ告ク可シ
 此條ニ記スル所及ヒ前二條ニ記スル所ヲ執
 行フタル事ハ之ヲ調書ニ記シ被告人裁判役
 書記官皆之ニ姓名ヲ手署ス可シ若シ被告人
 姓名ヲ手署スルコトヲ知ラス又ハ之ヲ肯セザ
 ル時ハ調書ニ其旨ヲ附記ス可シ
 第二百九十七條 若シ被告人前條ニ循ヒ裁判

役ヨリ告知ヲ受クルコトナキ時ハ五日以上ノ
 時間取調局ノ言渡ヲ取消ス可キ旨ヲ届出ル
 コトナント雖モ其届ヲ為ス可キ權ヲ失フコトナ
 ク重罪裁判所ノ確定ノ裁判言渡アリシ後ニ
 至リ其權ヲ行フコトヲ得可シ
 第二百九十八條 檢事長モ亦被告人問糺ノ時
 ヨリ五日内ニ重罪取調局ノ言渡ヲ取消サン
 トスル旨ヲ届出ツ可ク若シ之ヲ為サル時
 ハ第二百九十六條ニ記スル如ク其權ヲ失フ
 可シ

第二百九十九條 〔千八百五十三年六月十日左

ノ如ク改ム〕重罪取調局ノ言渡即チ被告人重

ト告ク可ヲ取消サントスルハ左ノ場合ニ限

ル可レ

第一 裁判所管轄ノ異ナル時

第二 被告人ノ申立ラレレ所為ヲ法律上

ニテ重罪ト為サ、ル時

第三 檢察官ノ申立ヲ聽カサリレ時

第四 法律上ニ定メタル負數ノ裁判役其

言渡ヲ為サ、ル時

第三百條 重罪取調局ノ言渡ヲ取消サントス

ル届書ハ書記局重罪裁ニ出ス可シ

書記官其届書ヲ受取リタル後直チニ控訴院

ノ檢事長ヨリ重罪取調局ノ言渡書ノ寫ヲ覆

審院ノ檢事長ニ送り覆審院ニ於テハ他事ヲ

差置キ先ツ其取消ノ願ヲ裁判ス可シ

第三百一條 〔千八百五十三年六月十日左ノ如

ク改ム〕重罪取調局ノ言渡ヲ取消サント願出

シタルニ管セス重罪裁判所ニテ公ケノ吟味

即チ被告人、証人、原告ニ至ル迄ノ手續ヲ為ス

可シ

然レテ第二百九十六條ニ記シタル期限ノ終
 リシ後其取消ノ願ヲ為シタル時ハ其願ニ管
 セス重罪裁判所ニテ公ケノ吟味ト裁判トニ
 取掛ル可シ○此場合ニ於テハ重罪裁判所ノ
 確定ノ裁判言渡アリシ後ニ非サレハ其取消
 ノ願並ニ其願ヲ為スニ付テノ憑據ヲ覆審院
 ニ差出ス可カラス
 又其他如何ナル原由アルヲ問ハス總テ法律
 上ニ定メタル期限ノ終リシ後又ハ其期限内

ト雖モ陪審ノ姓名ヲ闡引ニ為シタル後ニ申
 出シタル裁判言渡取消ノ願ハ此條ニ記スル
 如クタル可シ

第三百二條 被告人ノ代言人ハ被告人ノ問糺
 ノ後之レト面談スルヲ得可シ

又其代言人ハ總テノ證書類ヲ檢視スルヲ
 得可シ但シ是レカ為メ其證書類ヲ他所ニ移
 シ又ハ吟味ノ手續ヲ遲延スルヲナカル可シ

第三百三條 更ニ新ナル證人ヲ問糺ス可キ時
 其證人重罪裁判所ノ管轄外ニ住居スルニ於

テハ其上席人又ハ上席人ニ代ル可キ裁判役
 其證人住居ノ地ノ下吟味掛リ裁判役又ハ其
 他ノ地ノ下吟味掛リ裁判役ヲシテ其申述ヲ
 聽カシム可シ○其下吟味掛リ裁判役其申述
 ヲ聽キタル上ニテ之ヲ書面ニ記シ封印ヲ為
 シテ重罪裁判所ノ書記官ニ送ル可シ

第三百四條 重罪裁判所ノ上席人又ハ之ニ代
 ル裁判役ヨリ呼出ヲ受ケテ出席セサル證人
 正當ノ差支アリシ證ヲ立テサル時又ハ其證
 人出席スルト雖モ證ヲ申述フルヲ肯セサ

ル時ハ重罪裁判所ニテ吟味ヲ受ケ第八十條
 ニ循ヒ罰ヲ受ク可シ

第三百五條 被告人ノ代言人ハ其事件ニ管ス
 ル證書類ノ中ニテ其辯論ノ為ニ有益ナリト
 思料スルモノヲ自己ノ費用ヲ以テ寫取リ又
 ハ寫取ラシムルヲ得可シ
 又罪犯ノ證ヲ立ル調書及ヒ證人ノ申述書ハ
 被告人ノ數如何ニ多キヲ問ハス無税ニテ其
 寫一通ノミヲ渡ス可シ
 上席人裁判役檢事長ハ此條ノ規則ノ如ク執

行フ可キトニ注意ス可シ

第三百六條 若シ檢察長又ハ被告人陪審ノ最
 初ノ會議ニテ其事件ノ審判ヲ受クルトテ欲
 セサル原因アル時ハ重罪裁判所ノ上席人ニ
 延期ノ願書ヲ差出シ其上席人延期願ヲ允許
 ス可キヤ否ヲ決定ス可シ又其上席人ハ自己
 ノ公務ヲ以テ其延期ヲ言渡スヲ得可シ

第三百七條 一箇ノ罪犯ニ付キ被告人數人ニ
 對シ重罪告訴狀數通アル時ハ檢察長其數箇
 ノ訴ヲ合ス可キノ求メヲ為スヲ得可シ又

裁判所ノ上席人ハ自己ノ公務ヲ以テ其事ヲ
 言渡スヲ得可シ

第三百八條 若シ一通ノ重罪告訴狀ニ互ニ附
 帶セサル罪犯數箇ヲ記シタル時ハ檢察長ヨ
 リ當時其罪犯中ニテ時ニ定メタル一箇又ハ
 數箇ノミヲ裁判ス可キトテ求ムルヲ得可シ
 又裁判所ノ上席人ハ自己ノ公務ヲ以テ其事
 ヲ言渡スヲ得可シ

第三百九條 重罪裁判所ノ會議ヲ開ク日ニ至
 リ裁判役列座シタル上ニテ陪審十二名闡引

ノ順序ニ從ヒ來聽人ノ席、原告被告ノ席、證人ノ席ト離レ被告人ト相對レテ席ニ就ク可シ

○第四章 吟味ノ事、裁判言渡ノ事、裁判言渡ノ如ク執行ノ事

○第一款 吟味ノ事

第三百十條 被告人ハ其逃ヒテ防ク為メ番卒一員ニ押送セラレ縛ヲ受クルヲナク裁判所ニ出ツ可シ ○被告人出席ノ上裁判所ノ上席人ヨリ其姓名、年齡、職業、住所、出產ノ地ヲ問フ可シ

第三百十一條 上席人ハ被告人ノ代言人ニ其本心ニ背キ詞ヲ發ス可カラズ又國ノ法律ヲ慢侮シテ詞ヲ發ス可カラズ禮節謙退ノ道ヲ守リ辨論ス可キヲ告ク可シ

第三百十二條 陪審皆帽ヲ脱レ立チ並ヒタル上ニテ上席人陪審ニ向ヒ左ノ語ヲ述フ可シ
汝等此度被告人某ノ受ケタル罪犯申立ヲ懇切ニ注意シテ審カニ取調ヘ被告人ノ權利並ニ其罪犯ヲ申立タル國民ノ權利ヲ損害スルヲ加ク且汝等決斷ヲ為スニ至ル迄

ハ人ト調ヲ參フ可カラス愛憎畏懼ノ心ヲ
 生ス可カラス悉サニ罪犯ノ告訴ト被告人
 ノ答辯トヲ聽キ以テ自主ノ權アル正直ノ
 人ニ適スル公平誠實ノ意ヲ以テ汝等ノ本
 心ト其心ニ思込タル所トニ從ヒ決斷ヲ為
 ス可キ事ヲ天ト人トニ對シ盟約ス可シ
 上席人此語ヲ述ヘ終リタル後陪審ヲ一人毎
 ニ其面前ニ呼寄セ然ル後陪審手ヲ舉ケ余之
 フ盟フト答フ可シ若シ陪審其誓ヲ為サハル
 時ハ其決斷ノ効ナカル可シ

第三百十三條 此式ヲ為シ終リタル後上席人
 ヲリ被告人ニ其聽ク所ノ事ニ注意ス可キヲ
 フ告ク可シ
 然ル上ニテ上席人書記官ヲシテ被告人ヲ重
 罪裁判所ニ移ス重罪取調局ノ言渡書ト重罪
 告訴狀トヲ讀上ケレム可シ
 書記官ハ高聲ニテ之ヲ讀上ク可シ
 第三百十四條 其讀上ノ濟ミタル後上席人更
 ニ被告人ヲシテ重罪告訴狀ニ記スル所ニ注
 意セシメ然ル後被告人ニ是レ即チ汝ハ告訴

セラル、所ナリ之ヨリ後其罪犯ノ證ノ申述ヲ聽ク可シト告ク可シ

第三百十五條 檢事長ハ更ニ告訴ノ旨趣ヲ辨明シタル上ニテ自己ノ求メ又ハ民事原告人ノ求メ又ハ被告人ノ求メニ因リ問糺ス可キ證人ノ姓名目録ヲ差出ス可シ
書記官高聲ニ其目録ヲ讀上ク可シ
其目録ニハ證人吟味ヨリ少クトモ二十四時前ニ檢事長又ハ民事ノ原告人ヨリ被告人ニ姓名、職業、住所ヲ告知シタル證人又ハ被告人

ヨリ檢事長ニ姓名、職業、住所ヲ告知シタル證人ノミヲ記ス可シ但シ第二百六十九條ニ循ヒ裁判所上席人ノ呼出サントスル證人ハ例外ナリトス

被告人及ヒ檢事長ハ告知書ニ全ク姓名ヲ記セサル證人又ハ其姓名ヲ記スルト雖モ職業住所等總テ其人ヲ知り得可キ諸件ヲ詳カニ記セサル證人ノ問糺ニ付キ故障ヲ述フルコトヲ得可シ

其故障ノ申述ハ即時ニ裁判所ニテ審判ス可

第三百十六條 上席人ハ證人ニ別段指定メタル室ニ退ク可キヲ命ス可レ○證人ハ其證ヲ申述フル時ニ非サレハ猥リニ其室ヲ出ツ可カラス○上席人已ムヲ得サル事情アル時ハ證人等ヲレテ其證ヲ述ヘンムル前ニ罪犯ノ事並ニ被告人ノ事ニ付キ互ニ談話スルヲ防ク為メノ處置ヲ為ス可レ

第三百十七條 證人等ハ檢事長ノ定メタル順序ニ從ヒ各自ニ其證ヲ申述ヲ可レ○證人ハ證ヲ述フル前ニ愛憎畏懼ノ心ナク正實ヲ述ヘ正實ノ外述ヘサル可キノ誓ヲ為ス可レ若シ其誓ヲ為サレバ其申述ヘタル證ノ効ナカル可レ

上席人ハ證人ニ其姓名、年齢、職業、住所ヲ問糺シ又被告人ノ告訴サレタル罪犯ノ以前ヨリ其被告人ヲ知リタルヤ否ヲ問糺シ又被告人或ハ民事原告人ノ血族ナルヤ姻族ナルヤ若シ血族姻族ナレハ何級ナルヤヲ問糺シ又被告人或ハ民事原告人ノ使用ヲ受クル者タル

ヤ否ヲ問糺ス可シ此問糺濟ミタル上證人口
 上ニテ證ヲ延フ可シ
 第三百十八條 上席人ハ書記官ヲシテ嘗テ證
 人ノ申述ヘレ所ト現ニ其申述フル所トノ差
 異増加ヲ書取ラシム可シ
 又檢事長及ヒ被告人ハ其差異増加ヲ書取ラ
 シムルヲ上席人ニ求ムルヲ得可シ
 第三百十九條 證人證ヲ述ヘ終リタル後上席
 人ヨリ證人ニ其述フル所ハ現ニ其席ニ在ル
 被告人ニ管シタルニ相違ナキヤヲ問ヒ然ル

後被告人ニ證人ノ述フル所ノ罪犯ノ證ニ答
 辨セント欲スルヤ否ヲ問フ可シ
 證人其證ヲ述フル間ハ他ヨリ詞ヲ參フ可カ
 ラス被告人及ヒ其代言人證人ニ問ハント欲
 スルヲアラハ證人ノ其證ヲ述ヘ終リタル後
 之ヲ上席人ニ願ヒ證人ニ問ハシム可シ然ル
 上ニテ被告人又ハ其代言人其證人ト其申述
 ヘタル罪犯ノ證トニ付キ自己ノ權利ヲ護ス
 ルニ有益ナリト思料スル所ヲ述フルヲ得可
 シ

上席人ハ事實ヲ明白ナラシムルカ為メ必要
 ナリト思フ所ノ諸件ヲ自己ノ職務ヲ以テ證
 人ト被告人トニ問フコトヲ得可レ
 又裁判役、檢察長、陪審ハ上席人ノ許ヲ得タル
 上ニテ同上ノ諸件ヲ證人ト被告人トニ問フ
 コトヲ得可レ○民事ノ原告人ハ其問ハント欲
 スル事ヲ上席人ニ願ヒ問ハシム可レ
 第三百二十條 各證人ハ其證ヲ述ヘ終リタル
 後陪審其決斷ヲナス為メ吟味ノ席ヲ退クニ
 至ル迄其席ニ留ル可レ但シ上席人ヨリ之ニ

及シタル言渡ヲ為レタル時ハ格別ナリトス
 第三百二十一條 檢察長又ハ民事原告人ヨリ
 出シタル證人ノ申述ハ濟ミタル後被告人ハ
 告訴狀ニ記シタル罪ヲ犯サ、ルノ證ヲ立ル
 為メ又ハ廉直ニテ行狀正シク名譽ヲ失ハサ
 ル人タルノ證ヲ立ル為メ其姓名目録ヲ出シ
 置キタル證人ヲシテ證ヲ述ヘシム可レ
 被告人ハ己レノ求メニテ證人ヲ呼出シタル
 費用ト其證人謝金ヲ得ント求ムル時ハ其謝
 金トヲ擔當ス可レ但シ檢察長被告人ノ申立

シ證人ヲ呼出ス時ハ事實ヲ分明ナラシムルニ有益ナル可シト思料シ自カラ之ヲ呼出ス
ヲ求メタル時ハ格別ナリトス

第三百二十二條 左ノ證人ノ申述ハ之ヲ聽ク可カラス

第一 被告人又ハ共ニ吟味ヲ受クル被告人中一人ノ父母、祖父母又ハ其他ノ尊屬ノ親

第二 子女、孫男、孫女又ハ其他ノ卑屬ノ親

第三 兄弟姉妹

第四 同上ノ級ノ姻族ノ親

第五 既ニ離婚シタルト否トヲ問ハス夫又ハ婦

第六 罪犯ヲ申立ルニ付キ法律上ニテ給料ヲ受クル者

然レモ此等ノ證人ノ證ヲ述フル時檢事長又ハ民事ノ原告人又ハ被告人其證ヲ述フルニ付キ故障ヲ申立テサルニ於テハ其證ヲ申述ハタルノ効アリトス

第三百二十三條 罪犯ヲ申立ルニ付キ法律上

ニテ給料ヲ受ケサル罪犯申立人ハ其證ヲ申述フルコトヲ得可シ但シ此場合ニ於テハ其證人罪犯ノ申立人タルコトヲ陪審ニ告知ス可シ

第三百二十四條 檢事長又ハ被告人ノ差出シタル證人第三百十五條ニ記シタル姓名目錄中ノ者タル時ハ縱令預メ書面ヲ以テ其證ヲ申述ヘタルコトナク又ハ別段呼出ヲ受クルコトナシト雖モ吟味ノ席ニテ其申述ヘノ聽ク可シ

第三百二十五條 凡ソ證人ハ之ヲ差出セシ者

ノ何人タルヲ問ハス五ニ問糺ヲ為ス可カラス

第三百二十六條 被告人ハ證人等ノ證ヲ述ヘ終リタル後其別段指示ス所ノ證人ヲ一旦吟吟ノ席ヨリ退カシメ其後更ニ一人毎ニ出席シテ其證ヲ述ヘシメ或ハ數人相對シ其證ヲ述ヘレムルコトヲ求ムルヲ得可シ

檢事長モ亦同一ノ權アリ

又上席人ハ自己ノ職務ヲ以テ之ヲ言渡スコトヲ得可シ

第三百二十七條 上席人ハ證人ノ申述ヲ聽ク
 前後又ハ之ヲ聽ク間ニ被告人中一人又ハ數
 人ヲ吟味ノ席ヨリ退カシメ罪犯ノ模様ニ付
 キ別席ニテ之ヲ吟味スルヲ得可シ然レモ
 各被告人ニ其席ニ居ラサル間為レタル所ノ
 諸件ヲ詳カニ告知シタル上ニ非サレハ更ニ
 總體ノ吟味ニ取掛ル可カラズ

第三百二十八條 證人吟味ノ間陪審檢事長裁
 判役ハ證人ノ申述又ハ被告人ノ答辯ノ中ニ
 ナ入用ナリト思料スル諸件ヲ書取ルヲ得

可シ但シ之カ為メ辯論ノ妨ヲ為ス可カラズ
 第三百二十九條 證人ノ證ヲ申述フル時間又
 ハ之ヲ申述ヘタル後上席人ヨリ罪犯ノ憑據
 タル可キ諸物件ヲ被告人ニ示シ被告人ヲシ
 テ之ヲ認ルヤ否ヲ自カラ答ヘシム可シ又上
 席人ハ別段ノ道理アル時同上物件ヲ證人ニ
 モ示ス可シ

第三百三十條 若シ吟味ノ上證人ノ述フル所
 全ク詐偽タル可シト思ハル、時ハ上席人檢
 事長ノ求メニ因リ又ハ民事ノ原告人或ハ被

告人ノ求メニ因リ又ハ自己ノ職務ヲ以テ直
 ナニ其證人ヲ名捕ヘシムルヲ得可シ○此
 場合ニ於テハ檢察長司法警察官吏ノ職ヲ行
 ヒ上席人又ハ上席人ヨリ別段任レタル裁判
 役下吟味掛リ裁判役ノ職務ヲ行フ可シ
 下吟味ヲ為レ終リタル上ニテ總テノ書類ヲ
 控訴院ノ重罪取調局ニ送り其局ニ於テ其證
 人ノ重罪犯ヲ告ク可キヤ否ヲ裁決ス可シ
 第三百三十一條 前條ノ場合ニ於テハ檢察長
 又ハ民事ノ原告人又ハ被告人ヨリ重罪裁判

所ノ次ノ會議ノ日ニ吟味ヲ延ハス可キヲ
 直ニ求ムルヲ得可ク又裁判所ヨリ公務ヲ以
 テ之ヲ言渡スヲ得可シ

第三百三十二條 若シ被告人ト證人ト互ニ其
 言語ノ相通セサル時ハ上席人其職務ヲ以テ
 二十一歳以上ノ通辨人ヲ任シ且其通辨人ヲ
 シテ互ニ異ナリタル言語ヲ用フル者ノ述フ
 ル所ヲ正實ニ譯解ス可キノ誓ヲ為サシム可
 シ若シ此等ノ規則ニ背ク時ハ其通辨シタル
 諸事ノ効ナカル可シ

被告人及ヒ検事長ハ通辯人ニ付キ故障ヲ述
 フルコトヲ得可シ但シ其故障ノ申述書ニハ其
 旨趣ヲ記ス可シ
 其故障ノ申述ハ裁判所ニテ裁判ス可シ
 證人、裁判役、陪審ハ縱令検事長及ヒ被告人ノ
 承諾アリト雖モ通辯人トナル可カラス若シ
 此等ノ者通辯ヲ為ス時ハ其通辯シタル諸事
 ノ効ナカル可シ
 第三百三十三條 若シ被告人聾啞ニシテ且文
 字ヲ書スルコトヲ知ラサル時ハ上席人平生被

告人ト應接スルニ慣熟セシ者ヲ換ヒ言語ヲ
 通セシム可シ
 證人聾啞タル時モ亦之ニ等シトス
 其他此條ニ記スル所ニ付キ前條ノ規則ヲ通
 シ用フ可シ
 聾啞者文字ヲ書スルコトヲ知ル時ハ其者ハ、
 聞紀及ヒ上席人ヨリ注意セシムル諸件ヲ書
 記官書面ニ記シテ之ヲ示シ其聾啞者亦其返
 答ヲ書面ニ記シテ差出ス可シ○書記官ハ總
 テ此等ノ書面ヲ讀上ク可シ

第三百三十四條 被告人數人ナル時ハ上席人
 最初吟味ヲ受ク可キ者ヲ定ム可シ但シ其數
 人ノ中罪犯ノ主者ナル時ハ最初ニ之ヲ吟味
 ス可シ
 他ノ被告人ハ各自次第ニ吟味ヲ受ク可シ
 第三百三十五條 證人等證ヲ述ヘ終リ且其中
 述ニ付キ辯論アリシ後民事ノ原告人又ハ其
 代言人及ヒ檢事長罪犯告訴ノ憑據ヲ辨ス可
 シ
 被告人又ハ其代言人之ニ答フ可シ

民事ノ原告人及ヒ檢事長ハ更ニ之ニ答フル
 可シ得可シ然レハ辯論ノ終リニハ被告人又
 ハ其代言人必ス詞ヲ發ス可シ
 然ル上ニテ上席人吟味ノ畢レル旨ヲ言渡ス
 可シ

第三百三十六條 上席人ハ吟味ニ付テノ諸件
 ヲ約縮ス可シ
 上席人ハ有罪ノ重立タル證又ハ無罪ノ重立
 タル證ヲ陪審ニ告ク可シ
 其後上席人ハ陪審ヲシテ其職務ニ注意セシ

可レ
上席人ハ後ノ數條ニ記スル如ク陪審ニ問フ
可レ

第三百三十七條 重罪告訴狀ニ記スル罪犯ニ
管レタル問ハ左ノ如シ

被告人ハ告訴狀第一條見合ニ記シタル摸

様ニテ云々ノ殺害云々ノ盜奪云々ノ重罪

ヲ犯シタルヤ

第三百三十八條 吟味ニ因リ告訴狀ニ記シタ

ル以外ノ罪ヲ重ク不可キ摸様アルヲ知リ

タル時ハ上席人左ノ問ヲ加フ可レ

被告人ハ云々ノ摸様ニテ重罪ヲ犯シタル

ヤ

第三百三十九條 被告人其罪犯ニ付キ法律上

ニテ赦宥ヲ得可レト為ス事情アルヲ申述

ハタル時ハ上席人左ノ如ク陪審ニ問フ可ク

若シ此規則ニ背ク時ハ其問ノ効ナカル可レ

刑法第三百二
十一條見合

其事情相違ナキヤ

第三百四十條 若シ被告人ノ年齢十六歳以下

ナル時ハ上席人左ノ如ク陪審ニ問フ可シ若
シ此規則ニ反ク時ハ其問ノ効ナカル可シ刑法
第六十六
條見合

被告人ノ罪ヲ犯シタルハ故意ヲ以テ為シ
タルヤ

第三百四十一條

〔千八百五十三年六月九日左

ノ如ク改ム〕總テ重罪ニ付テハ初犯ト再犯ト
ヲ論セス上席人陪審ニ告訴狀ニ記スル所ノ
問ヲ為シ又ハ吟味ニ因リ知リタル所ノ問ヲ
為シタル後陪審ノ全頁中其過半被告人ノ為

メ罪ヲ輕クス可キ模様アリト思ハ、左ノ如
ク申立ツ可キ旨ヲ陪審ニ告ク可シ若シ此規
則ニ背ク時ハ其問ノ効ナカル可シ
陪○審○全○頁○ノ○中○過○半○ノ○說○ニ○テ○被○告○人○ノ○為○メ○
罪○ヲ○輕○ク○ス○可○キ○摸○様○アリトス

此問ヲ為シタル後上席人數箇ノ問ヲ記シタ
ル書面ヲ陪審長ニ渡ス可シ但シ重罪告訴狀
罪犯ノ證ヲ立ル調書及ヒ其他證人ノ申述書
ヲ除クノ外總テ訴訟ニ管シタル書類モ亦之
ニ添ヘ渡ス可シ

上席人ハ陪審ニ秘密ノ投票ヲ以テ決斷ヲ為ス可キヲ告ク可シ第百四十條見合
 次ニ上席人ハ被告人ヲ吟味ノ席ヨリ退カシム可シ

第三百四十二條 上席人ヨリ陪審ニ問ヲ為シ且其問ヲ記シタル書面ヲ渡シタル上ニテ陪審其室ニ退キ商議ス可シ
 陪審ノ姓名ヲ闡引ニ為シタル時最モ先ニ姓名票ノ出テタル者ヲ陪審ノ長ト為シ又ハ其者承諾ノ上ニテ陪審全員ノ別段指定メタル

者ヲ以テ長ト為ス可シ
 陪審商議ヲ為シ始ムル前ニ其長左ノ心得書ヲ讀上ク可シ但シ其心得書ハ大字ニ記シテ室内ノ最モ著ルキ場所ニ張出シ置ク可シ其文左ノ如シ
 凡ソ法律ハ陪審ノ確的ト為人憑據如何ヲ論スルヲテ又徵證ノ完備シテ信據ス可キヤ否ヲ試ミ知ル可キ規則ヲ定ムルヲテ唯陪審ハ罪犯ノ證及ヒ被告人ノ答辯ニ付キ其是非曲直如何ヲ靜然沈思シテ自カ

ラ之ヲ己レニ問ヒ且其本心ニ從テ決斷ス
 可シ○法律ハ陪審ニ對シ證人幾許ノ述フ
 ル所ヲ正實ト為ス可レト定メ命スルニ非
 ス又云々ノ調書云々ノ證書云々ノ證人云
 々ノ徵憑ニ據ラサル證ヲ正實ト為ス可カ
 ラスト定メ命スルニ非ス其心中如何ニ思
 ヒ定ムルヤト云フヲ問フ而已トス是レ則
 チ陪審ノ職務ノ要領ナリ
 陪審ノ著意セサルヲ得可カラサル要件ハ
 其商議スル所固ト罪犯告訴狀ノ事ニ管ス

ルニ因リ其職務告訴狀ニ記スル條件並ニ
 之ニ附帶レタル條件ノミヲ議ス可キニ在
 テ若シ其決斷ヲ為シタル上被告人刑法ノ
 規則ニ循ヒ如何ナル處置ヲ受ク可キヤ預
 メ之ヲ思慮スルカ如キハ即チ其最要ノ職
 務ニ背クモノトス夫レ陪審ノ職ハ罪犯ヲ
 告訴スルニ非ス又之ヲ罰スルニ非ス唯被
 告人ノ罪ノ有無ヲ決斷スルニ過キサル而
 已

第三百四十三條 陪審ハ其決斷ヲ為シタル後

ニ非サレハ其室ヲ出ルヲ得ス
 又如何ナル原由アリト雖モ上席人ヨリ允許
 ノ書面ヲ得タル上ニ非サレハ陪審ノ商議中
 其室ニ入ル可カラス
 上席人ハ裁判所ニ屬シタル備警兵ノ長ニ陪
 審ノ室ニ人ノ出入スルヲ制ス可キ命令書ヲ
 渡ス可シ但シ其備警兵長ノ姓名官位ハ其命
 令書ニ附記ス可シ
 此命ニ背キタル陪審ハ五百「フラン」ヨリ多
 カラサル罰金ヲ裁判所ヨリ言渡サル可シ

陪審ヲ除クノ外總テ此命ニ背キタル者又ハ
 此命ノ如ク執行ハシメサル者ハ二十四時間
 禁錮ノ刑ニ處セララル可シ

第三百四十四條 陪審ハ先ツ主タル事件ヲ商
 議シ次ニ之ニ附帶シタル數箇ノ模様ヲ次第
 ニ商議ス可シ

第三百四十五條 一千八百三十五年九月九日左
 ノ如ク改ム陪審ノ長第三百三十六條ニ記シ
 タル如ク上席人ノ為シタル問ノ書面數通ヲ
 次第ニ讀上ケタル後陪審等犯罪告訴ノ主タ

ル箇條並ニ罪ヲ輕クス可キ模様及ヒ罪ヲ重クス可キ模様ニ付キ秘密ノ投票ヲ以テ決斷ヲ為ス可シ

第三百四十六條 〔千八百三十五年九月九日左ノ如ク改ム〕又第三百三十九條及ヒ第三百四十條ニ記シタル場合ニ於テ上席人ノ為シタル問ニ付テモ亦前條ニ記スル如ク處置ヲ為シ且秘密ノ投票ヲ以テ決斷ス可シ

第三百四十七條 〔千八百三十五年六月九日左ノ如ク改ム〕陪審被告人ヲ有罪ナリト為ス決

斷又ハ罪ヲ輕クス可キ模様ノ有無ニ付テノ決斷ハ全員中其半以上ノ投票ニ因リ之ヲ為ス可シ○其決斷書ニハ之ヲ可トセシ者ノ數ヲ記スルヲナク唯全員ノ半以上之ヲ可トスル旨ヲ記ス可シ但レ此條ニ記スル所ノ規則ニ背キタル時ハ其決斷ノ効ナカル可シ
第三百四十八條 次ニ陪審再ヒ吟味ノ席ニ来リ其坐ニ就ク可シ

然ル時上席人ヨリ其決斷ノ如何ヲ問フ可シ陪審ノ長立上リ其心臟ノ上ニ手ヲ置テ左件

ヲ述フ可シ

我面目及ヒ本心ニ從フテ天ト人トニ擔ヒ
陪審ノ決斷ハ然リ被告ノ云々罪ナル又
ハ否被告ノ云々罪ナキ

第三百四十九條 陪審ノ決斷書ハ陪審全員ノ

面前ニテ其長之ニ姓名ヲ手署シ且之ヲ上席
人ニ渡ス可シ

上席人ハ自カラ之ニ姓名ヲ手署シ且書記官
ヲシテ姓名ヲ手署セレハ可シ

第三百五十條 陪審ノ決斷ハ之ヲ取消サント

訴フ可カラス

第三百五十一條 〔千八百三十一年三月四日廢

ス〕

第三百五十二條 〔千八百五十三年六月九日左

ノ如ク改ム〕陪審被告人ヲ罪有リト決斷シタ

ル時裁判所ニテ陪審法式ニ違フヲナレト雖

モ罪ノ本案ニ付キ錯誤シタルヲ確知シタル

ニ於テハ裁判言渡ヲ暫ク止メ其事ヲ次ノ會

議ノ日ニ延シテ其日ニ至リ更ニ陪審ヲシテ

商議セシム可シ但レ以前ノ陪審ハ再度ノ陪

審ノ頁中ニ參加ス可カラス
 此條ニ記スル事ハ願ヲ以テ為ス可カラス陪
 審ノ決斷ヲ公ケニ言渡シタル後裁判所ノ公
 務ヲ以テ之ヲ為ス可シ
 再度ノ陪審ノ決斷以前ノ陪審ノ決斷ト同シ
 キ時ト雖モ裁判所ニテ再度ノ陪審ノ決斷ヲ
 取消シ更ニ陪審ヲシテ商議セシム可カラス
 第三百五十三條 證人ノ吟味及ヒ双方辯論ヲ
 為シ始メタルヨリ陪審ノ決斷ヲ為スニ至ル
 迄ハ間斷ナク且外人ト談話スルヲナク其手

續ヲ繼續シテ行フ可シ○上席人ハ裁判役陪
 審、證人、被告人等ノ休息ノ為メ必要ナル時間
 ノニ其手續ヲ止ムルヲ得可シ
 第三百五十四條 呼出ヲ受ケタル證人出席セ
 サル時ハ裁判所ニテ檢事長ノ求メニ從ヒ證
 人ノ姓名、目錄書中ノ最初ニ記シタル者證ヲ
 申述ヘサル内ニ罪犯ノ吟味ヲ次ノ會議ノ日
 ニ延ハスヲ得可シ
 第三百五十五條 若シ證人呼出ヲ受ケテ出席
 セサルニ付キ罪犯ノ吟味ヲ次ノ會議ノ日ニ

延ハス時ハ總テ證人等呼出、費用、證書類ニ付テノ費用、證人等ノ旅費及ヒ其他其罪犯一件ヲ裁判スル為メノ費用、皆其出席セサル證人之ヲ擔當ス可シ但シ其證人ハ檢事長ノ求メニ因リ次ノ會議ノ日ニ吟味ヲ延ハス言渡書ヲ以テ此等ノ費用ヲ償フ可キノ言渡ヲ受ケ若シ之ヲ償ハサルニ於テハ名捕ヘラル可シ

又同上ノ言渡書ニハ其證人ヲシテ證ヲ述ヘシムル為メ公ケノ兵力ヲ以テ之ヲ裁判所ニ

引出ス可キ旨ヲ記ス可シ

又如何ナル場合ニ於テモ呼出ヲ受ケテ出席セサル證人又ハ出席スト雖モ擔ヲ為スヲ肯セス或ハ證ヲ述フルヲ肯セサル證人ハ

第八十條ニ記スル所ノ罰ヲ言渡サル可シ

第三百五十六條 其言渡ヲ受ケタル證人ハ其住所ニ其言渡書ノ送達ヲ得タルヨリ十日内ニ其言渡ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可ク又其住所隔リタル時ハ五「ミリアメートル」毎ニ一日ノ猶預ヲ増ス可シ但シ其證人出席ヲ為

サ、ル正當ノ差支アリタル證ヲ立テ又ハ其罰金ヲ更ニ減ス可キ道理アル證ヲ立テタル時ハ其故障ノ申述ヲ聞届ク可シ

○第二款 裁判言渡ノ事及ヒ裁判言渡ノ如ク執行ノ事

第三百五十七條 上席人ハ被告人ヲ出席セシメタル上書記官ヲシテ其面前ニ於テ陪審ノ決斷書ヲ讀上ケシム可シ

第三百五十八條 陪審ノ決斷ニテ被告人ヲ無罪ナリトスル時ハ上席人ヨリ被告人罪犯ノ

告訴ヲ免レタル旨ヲ言渡シテ之ヲ赦宥ス可キヲ命ス可シ但シ他ノ原由ノ為メ禁錮セラレシ時ハ格別ナリトス

然レ後双方互ニ損失ノ償ヲ得ント求メ且互ニ相手方ノ求ムル所ヲ拒ム憑據ヲ述ヘタル上ニテ裁判所ニ於テ檢事長ノ申立ヲ聽キ其償ノ事ヲ裁判ス可シ

然レモ裁判所ニテ相當ナリト思料スル時ハ其裁判役中ノ一員ヲシテ双方ノ申述ヲ聽キ證書類ヲ檢視セシメ且裁判役吟味ノ日ニ至

リ其申立ヲ為サシム可シ但シ其吟味ノ日ニ
 至リ双方更ニ其申述ヲ為スルヲ得可ク裁判
 所ニテハ更ニ檢察官ノ申立ヲ聽キタル上之
 ヲ裁判ス可シ
 又被告人無罪ノ言渡ヲ得タル時ハ其罪ヲ申
 立タル者ニ對シ枉訴ニ付テノ損害ノ償ヲ得
 シト求ムルヲ得可シ然レモ官吏ハ其職務
 ヲ行フニ當リ知り得タルト思料ヒシ罪犯ヲ
 申立テタルニ因リ枉訴ニ付テノ損害ノ償ヲ
 為ス可キノ訴ヲ受クルヲナカル可シ但シ別

段ノ道理アル時官吏故意ヲ以テ人ヲ枉ハ格
 訴シタルカ如キヲ云フ別ナリトス
 檢察長ハ被告人ノ求メニ因リ其罪犯ノ申立
 人ハ何人タルヤヲ知ラシム可シ

第三百五十九條 被告人ヨリ其罪犯申立人又
 ハ民事ノ原告人ニ對シ損失ノ償ヲ求ムル訴
 又ハ民事ノ原告人ヨリ被告人又ハ既ニ刑ヲ
 言渡サレシ者ニ對シ損失ノ償ヲ求ムル訴ハ
 重罪裁判所ニ之ヲ為ス可シ
 民事ノ原告人ハ裁判言渡ノ前ニ損失ノ償ヲ

得ントスル訴ヲ為スコシ其裁判言渡ノ後ニ
 至リテハ其訴ヲ許サス
 又被告人其犯罪申立人ヲ知リタル時ハ前項
 ニ記スル所ニ等シトス
 又被告人裁判言渡ノ後ニ至リ其犯罪申立人
 ヲ知リタル時ト雖モ猶重罪裁判所ノ會議中
 タルニ於テハ其被告人重罪裁判所ニ損失ノ
 償ヲ得ントスル訴ヲ為スコシ若シ之ヲ為サ
 ル時ハ其訴ヲ為スコキノ權ヲ失フ可シ○
 又被告人重罪裁判所ノ會議ノ終リシ後ニ其

犯罪申立人ヲ知リタル時ハ民法裁判所
初告
 所ニ同上ノ訴ヲ為スコシ
 又罪犯ノ吟味ニ参加セザリレ者ハ民法裁判
 所ニ損失ノ償ヲ得ント訴ヲ可レ
 第三百六十條 法律ニ循ヒ無罪ナリトノ言渡
 ヲ得タル者ハ同一ノ事ニ付キ再ヒ其罪ヲ訴
 ヘタル、ヲナカル可レ
 第三百六十一條 辨論ノ時間證書ニ因リ又ハ
 證人ノ申述ニ因リ被告人ニ更ニ他ノ罪犯ヲ
 リト思ハル、時ハ上席人其被告人ニ無罪ノ

言渡ヲ為シタル後其被告人他ノ罪犯ノ事ニ
 付キ更ニ訴ヲ受ク可キ旨ヲ言渡シテ且其初
 告人ニ對シ第九十一條ニ記スル差別ニ從ヒ
 呼出狀又ハ引出狀ヲ出シ又別段ノ道理アル
 時ハ收監狀ヲ出シテ重罪裁判所所在ノ地ノ
 下吟味掛リ裁判役ノ面前ニ至ラシメ更ニ下
 吟味ヲ受ケシム可シ
 然レニ此事ニ付テハ嘗テ為シタル吟味ノ未
 タ終ラサル前ニ檢察官後ニ他ノ罪ヲ訴フ可
 キ旨ヲ取極メ置キタルニ非サレハ前項ノ規

則ノ如ク執行フ可シ

第三百六十二條 陪審被告人ヲ有罪ナリト決

斷スル時ハ檢察長刑法ニ循ヒ之ヲ罰ス可キ

トテ裁判所ニ求ム可シ

民事ノ原告人ハ取戻ノ求メ及ヒ損失ノ償ヲ

得ントスル求メヲ為ス可シ

第三百六十三條 上席人ハ被告人ニ辯論セン

ト欲スル事ヲキヤ否ヲ問フ可シ

被告人及ヒ代言人ハ其申立テラレタル所為

ノ偽タルヲ述フルトテ得ス唯其所為ヲ法律

上ニテ禁セサル事又ハ法律上ニテ罪犯ト為
 サ、ル一又ハ検事長ノ求メタル如キ刑ニ當
 ラサル事又ハ民事ノ原告人ニ損失ノ償ヲ為
 スニ及サル事又ハ民事ノ原告人ノ求ムル所
 ノ償高過分ナル事ヲ申述フルヲ得可シ
 第三百六十四條 陪審被告人ヲ有罪ナリト決
 斷シタルト雖モ刑法上ニテ其所為ヲ禁スル
 一ナキ時ハ裁判所ヨリ其赦罪ヲ言渡ス可シ
 第三百五十八條ト異ナリテ被告人犯罪ヲ犯シ
 タルニ相違ナシト雖モ刑法中ニ其犯罪ニ當
 ル可キ箇條ナキヲ以テ其罪ヲ赦マラ云フ第
 三百五十八條ニテハ上席人無罪ヲ言渡レ此

條ニテハ裁判所全負ニ
 赦罪ヲ言渡スナリ

第三百六十五條 若シ其所為刑法上ニテ禁止

シタル事ナル時ハ吟味ノ上重罪裁判所ノ管

轄ス可キ所ニ非サル一即チ輕罪註誤分明タ

ルニ至ルト雖モ重罪裁判所ニテ法律上ニ定

メタル其刑ヲ言渡ス可シ 第百九十

若シ被告人ニ數箇ノ重罪及ヒ輕罪アル時ハ

其中ノ最重ナル罪ニ因テ其刑ヲ定ム可シ

第三百六十六條 被告人ノ赦罪ヲ言渡シタル

時ハ 第百六十條之ヲ無罪ナリト言渡シ或ハ

刑ニ處ス可キトテ言渡シタル時ト同シク重
 罪裁判所ニテ民事ノ原告人又ハ被告人ノ求
 ムル所ノ損失ノ償ヲ裁判シテ其高ヲ定メ又
 ハ第三百五十八條ニ記スル如ク裁判役中ノ
 一員ヲシテ双方ノ申述ヲ聽キタル上書類ヲ
 檢視セシメ且此等ノ諸事ヲ裁判所ニ申立テ
 シム可シ

又重罪裁判所ニテ被告人ノ枉奪シタル物件
 ノ其所有者民事原告人ニ還ス可キトテ言渡ス可
 シ

然レモ被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ同上
 ノ物件ノ所有者被告人期限内ニ覆審院ニ上
 告スルトナク又ハ上告スル雖モ覆審院ニテ
 重罪裁判所ノ言渡ヲ確定シタルノ證ヲ立テ
 タルニ非サレハ其物件ヲ取戻ス可カラム
 第三百六十七條 陪審被告人ニ赦宥ス可キノ
 事情第三百三十九條以下見合アリト決斷シタ
 事時ハ裁判所ニテ刑法ニ記スル如ク言渡ス
 可シ

第三百六十八條 被告人刑ヲ言渡サレ又ハ民

事ノ原告人負訴訟トナル時ハ官ト相手方ト
 ニ對シ裁判所ノ費用ヲ償フ可シ
 重罪ニ付キ民事ノ原告人負訴訟トナラサル
 時ハ裁判所ノ費用ヲ擔當スルニ及ハス
 又民事ノ原告人千八百十一年六月十八日ノ
 命令書ニ循ヒ裁判所ノ費用高ク官ニ預ケ置
 キタル時ハ之ヲ其原告人ニ還ス可シ
 第三百六十九條 裁判役ハ低聲ニテ評議ヲ為
 ス可ク又別席ニ退テ評議ヲ為スヲ得可シ
 然レモ裁判言渡ハ衆庶並ニ被告人ノ面前ニ

テ上席人高聲ニ之ヲ為ス可シ
 上席人其言渡ヲ為ス前ニ其罪犯ニ管スル刑
 法ノ箇條ヲ讀上ク可シ
 書記官ハ其裁判言渡ヲ書面ニ記シ且其刑法
 ノ箇條ヲ記入ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ
 百^一フランクノ罰金ヲ言渡サル可シ
 第三百七十條 裁判言渡書ノ正本ハ之ニ管シ
 タル裁判役皆姓名ヲ手署ス可シ若シ此規則
 ニ背ク時ハ書記官百^一フランクノ罰金ヲ言渡
 サレ又別段ノ道理アル時ハ書記官並ニ裁判

役損害ノ償ヲ為ス可キノ訴ヲ受ク可シ
 裁判言渡書ノ正本ハ其言渡ノ時ヨリ二十四
 時間ニ裁判役姓名ヲ手署ス可シ
 第三百七十一條 上席人ハ裁判言渡ヲ為レタ
 ル後其時ノ模様ニ從ヒ被告人ニ固志耐忍ス
 可キトテ論シ又ハ後日其行狀ヲ改ム可キト
 テ論ス可シ
 又上席人ハ被告人ニ覆審院ニ上告スルヲ得
 可キ權アルトテ其權ヲ行ヒ得可キ期限トテ
 告ク可シ

第三百七十二條 書記官ハ法律上ニ定ムル所
 ノ法式ヲ盡ク行フタルヲ證スル為メ重罪裁
 判所會議ノ調書ヲ記ス可シ
 其調書ニハ被告人ノ答詞及ヒ證人ノ申述ヲ
 記ス可カラズ但シ第三百十八條ニ循ヒ證人
 申述ノ變更及ヒ齟齬シタル事ヲ記スルハ格
 別ナリトス
 其調書ハ上席人ト書記官ト姓名ヲ手署ス可
 シ但シ其調書ハ預メ之ヲ刊行シ置ク可カラ
 ス

若シ此條ノ規則ニ循ハサル時ハ調書ノ効ナ
カル可レ

若レ書記官調書ヲ記スルヲ怠リ又ハ此條第
三項ノ規則ニ背ク時ハ五百「フラン」ノ罰金
ヲ言渡サル可レ

第三百七十三條 刑ヲ言渡サレレ者ハ其言渡
ヲ受ケタルヨリ覆審院ノ上告セントスル
ヲ書記局ニ届出ツルニ至ル迄三日ノ猶預ヲ
得可レ

又檢事長ハ同上ノ猶預ノ期限内ニ覆審院ニ

上告セントスルヲ書記局ニ届出スルヲ得
可レ

民事ノ原告人モ亦同上ノ期限内ニ覆審院
上告セントスルヲ書記局ニ届出ツルヲ得
可レ但シ民事ノ原告人ハ其民事ノ權利ノミ
ニ付キ其上告ヲ為スヲ得可レ

同上ノ期限間ハ重罪裁判所ノ言渡ノ執行ヲ
暫ク延ハス可シ又覆審院ニ上告シタル時ハ
覆審院ノ言渡書ヲ受取ルニ至ル迄其執行ノ
暫ク延ハス可シ

第三百七十四條 第四百九條及ヒ第四百十二條ノ場合ニ於テハ、檢事長又ハ民事ノ原告人二十四時内ニ覆審院ニ上告ス可シ

第三百七十五條 第三百七十三條ニ記シタル猶豫ノ期限内ニ覆審院ニ上告セサル時ハ其期限ノ終リシヨリ二十四時間ニ犯人ヲ刑ニ處ス可シ又覆審院ニ上告シタル時ハ覆審院ニテ其上告ヲ棄却スル言渡書ヲ受取リシヨリ二十四時間ニ刑ニ處ス可シ

第三百七十六條 犯人ヲ刑ニ處スルニ付テハ

檢事長其指揮ヲ為ス可シ但シ檢事長ハ此事ニ付キ直チニ公ケノ兵力ノ助ヲ借ラント求ムルヲ得可シ

第三百七十七條 刑ヲ言渡サレタル者刑ニ處セラル、前ニ申述ント欲スル事アル時ハ之ヲ刑ス可キ地ノ裁判役一員書記官ノ立會ニテ之ヲ聽ク可シ

第三百七十八條 書記官ハ犯人ヲ刑ニ處シタル調書ヲ記シ二十四時間ニ之ヲ重罪裁判所ノ裁判言渡書ノ末ニ登記ス可シ若シ此規則

ニ背ク時ハ百「フラン」ノ罰金ヲ言渡サル可
 レ○又書記官ハ其登記ヲ為シタル部分ニ姓
 名ヲ手署シ且此等ノ諸事ヲ調書ノ端ニ附記
 ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ百「フラン」ノ
 罰金ヲ言渡サル可シ○又書記官ハ其附記レ
 タル部分ニモ亦姓名ヲ手署ス可シ但シ調書
 ヲ裁判言渡書ノ末ニ登記シタル時ハ其登記
 ヲ調書ノ正本ニ等シク證ト為ス可シ
 第三百七十九條 犯人ヲ刑ニ處ス可キ裁判言
 渡ヲ為ス以來其吟味中ニ證書ニ據リ又ハ證

人ノ申述ニ據リ其犯人更ニ他罪アルヲ知
 リ其罪是迄申立ラレタル罪ヨリ更ニ重キ摸
 様ナル時又ハ其犯人ト共ニ罪ヲ犯セシ者名
 捕ハラレタル時ハ重罪裁判所ニテ其更ニ發
 覺シタル罪ニ付キ治罪法ノ規則ニ循ヒ再ヒ
 犯人ノ罪ヲ告訴ス可キヲ言渡ス可シ
 此等ノ場合ニ於テハ檢事長再度ノ訴ニ付キ
 裁判言渡アル迄ハ初度ノ言渡ノ如ク執行フ
 一ヲ暫ク延ハス可シ

第三百八十條 重罪裁判所ノ裁判言渡書ノ正

本ハ之ヲ集メテ州ノ首府ノ初告裁判所ノ書記局ニ納ム可シ

然レモ控訴院所在ノ地ニ在ル重罪裁判所ノ裁判言渡書ノ正本ハ其控訴院ノ書記局ニ納ム可シ

○第五章 陪審ノ事及ヒ陪審ヲ撰ム方
法

○第一款 陪審ノ事

第三百八十一條 〔千八百五十三年六月四日左ノ如ク改ム〕滿三十歳ノ齡ニシテ政權、民權、族

權親族會議ニ加ハルノ權、後見ヲ有シ且後ノ人タルノ權ノ如キヲ云フ
二條ニ記シタル差支ナキ者ニ非サレハ陪審トナル可カラス若レ此規則ニ背ク時ハ其決斷ノ効ナカル可シ

第三百八十二條 〔千八百五十三年六月四日左

ノ如ク改ム〕左ノ數人ハ陪審トナル可カラス

第一 施體ト加辱トノ刑ヲ言渡サレシ者又ハ加辱ノミノ刑ヲ言渡サレシ者

第二 重罪ニ付キ懲治ノ刑ヲ言渡サレシ者

第三 徒刑又ハ拽球ノ刑ヲ言渡サレタル士卒

第四 三月以上禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル者

第五 盜奪、詐偽、破信ノ罪、公ケノ監守人其監守スル物件ヲ奪フタル罪、刑法第三百三十條及ヒ第三百三十四條ニ記シタル風俗ヲ破ル罪、人倫ノ道或ハ法教ノ道ヲ害スル罪、物件所有ノ權或ハ親族ノ權ヲ犯スノ罪、職業ナク且生計ノ道ナク寄遊

スル罪、乞食ノ罪ヲ犯シタルニ付キ期限ノ長短ヲ問ハス禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル者及ヒ募兵ノ事ニ付キ千八百三十二年三月二十一日ノ法律ノ第三十八條第四十一條第四十三條第四十五條ノ規則ニ背キ又ハ刑法第三百十八條及ヒ第四百二十三條ノ規則ニ背キ或ハ千八百五十一年三月二十七日ノ法律ノ第一條ノ規則ニ背キタルニ付キ期限ノ長短ヲ問ハス禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル者

第六 高利貸ノ罪ノ為メ刑ヲ言渡サレタル者

第七 重罪ヲ告訴セラレタル者又ハ重罪ヲ告訴セラレタル抗傳者

第八 職ヲ退ケラレタル公證人、書記官及ヒ裁判所官員

第九 復權ヲ得サル分散人

第十 治産ノ禁ヲ受ケル者及ヒ其他裁判所ヨリ任シタル補佐人ノ世話ヲ受ケタル者

第十一 治罪法第三百九十六條及ヒ刑法

第四十二條ニ循ヒ陪審タルノ禁ヲ受ケル者

第十二 收監狀又ハ禁錮狀ニ因リ名捕ハレタル者

第十三 一月以上禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル者其刑期ノ終リニヨリ五年ノ時間

第三百八十三條 千八百五十三年六月四日左ノ如ク改ム左ノ職ニ在ル者ハ陪審ノ職務ヲ兼子行フ可カラヌ

執政

元老院ノ長

議事院ノ長

參議官員

執政局ノ書記長

洲長及ヒ御長

州會ノ議員

裁判役

裁判所ノ檢察官

邏卒長

官許アル法教ノ僧徒

現ニ奉職スル海陸軍ノ士卒

租稅官署官ノ森林電信機官署ニテ現ニ奉

職スル官員

邑ノ小學校ノ授業師

又左ノ諸人ハ陪審トナル可カラス

雇ノ僕婢

佛蘭西ノ文字ヲ讀ミ佛蘭西ノ文字ヲ書ク

トヲ知ラサル者

千八百三十八年六月三十日ノ法律ニ循ヒ

狂病院ニ入りタル者

又左ノ諸人ハ陪審タルヲ免ル、ト得可シ

第一 七十歳以上ノ者

第二 毎日ノ所作ニ因リ生計ヲ營ム者

第三百八十四條 ハタラク〔廢ス〕

第三百八十五條 何人ニ限ラス別段裁判所ノ

言渡アルニ非ザレハ千八百五十三年六月四

日ノ法律第十一條〔以前ノ治罪法第三百八十

二條〕ニ記スル陪審姓名目録ノ中ヨリ除去セ

ラル、トナカル可シ但、其言渡ヲ控訴レ又ハ

其言渡ノ取消ヲ覆審院ニ上告レタル間ハ其
言渡ノ執行ヲ暫ク上ム可シ

第三百八十六條 〔廢ス〕

第三百八十七條 〔廢ス〕

第三百八十八條 〔廢ス〕

第三百八十九條 陪審ト為ス可キ各人ニハ其

全貫ノ姓名目録ヲ送ルニ及ハズ但、其姓名

ノ加ハリタル證トシテ州長ヨリ唯其目録ノ

拔書ヲ送ル可シ○其拔書ハ姓名目録ヲ現ニ

用ニ供スルヨリ少クトモ八日前ニ之ヲ送ル

可シ
 其姓名目録ヲ現ニ用ニ供ス可キ期日ハ其拔
 書ニ之ヲ附記シ且其日ニ出席ス可キ呼出ヲ
 附記ス可シ若シ其日ニ出席セサル者ハ此法
 ニ記スル所ノ罰ヲ受ク可シ第三百九十六條見合
 若シ其拔書ヲ送達スル時本人其住所ニアラ
 サル時ハ其住所ト邑長又ハ其補佐トニ之ヲ
 届ケ後ニ邑長又ハ其補佐ヨリ本人ニ其旨ヲ
 告知ス可シ

第三百九十條 關引ニテ選ミタル陪審四十名

中ニ嘗テ千八百五十三年六月四日ノ法律第
 十一條(以前ノ治罪法第三百八十七條)ニ循ヒ
 姓名目録ヲ記シタル後死去スル者アリ又ハ
 陪審ノ職務ヲ行フヲ能ハサルニ至リシ者ア
 リ又ハ陪審ノ職務ヲ兼子行フ可カラサル職
 ヲ授リタル者アル時ハ重罪裁判所會議ノ席
 ニテ檢事長ノ申立ヲ聽キタル上其代貢ヲ撰
 ム可シ
 其代貢ヲ撰ム方法ハ千八百五十三年六月四
 日ノ法律第十八條(以前ノ治罪法第三百八十

八條ニ記シタル所ニ循フ可シ

第三百九十一條 陪審其職務ヲ為シ終リタル

上ハ其姓名目錄即姓名四頁ノ効ナカル可シ

○臨時ニ重罪裁判所ノ會議ヲ開ク時ノ外第

三百八十九條ニ記スル呼出ニ應シタル陪審

ハ一年內ニ二度姓名目錄十月八日ノ法律第六

一條ニ記スル陪審全頁ノ目錄ノ中ニ書加ヘラル、ナカ

ル可シ○又臨時ニ重罪裁判所ノ會議ヲ開ク

時ト雖モ一年ニ二度以上姓名目錄中ニ書加

ヘラル、ナカル可シ○重罪裁判所ノ會議

ヲ開ク前ニ其裁判所ニテ暫時間ノ事ト思料

セシ差支ニ因リ出席セサル陪審ハ第三百八

十九條ノ呼出ニ應レタルモノト為ス可カラ

ス○其陪審ノ姓名及ヒ一度罰金ヲ言渡サレ

又ハ再度罰金ヲ言渡サレタル陪審第三百九

合ノ姓名書ハ重罪裁判所ノ會議終リタル後

直チニ之ヲ控訴院ノ上席人ニ送り其上席人

其旨ヲ陪審ノ全頁姓名目錄十月八日ノ法律

第十一條ニ記ノ中ニ記入ス可シ但シ本年內

ニ關引ニ為スナカ時ハ此等ノ陪審ノ姓名

ヲ翌年ノ姓名目録中ニ加フ可シ

第三百九十二條 司法警察ノ職ヲ行フ者、證人、

同一ノ事件ニ付キ陪審トナル可カラス若シ

此規則ニ背ク時ハ其陪審ノ為シタル決斷ノ

効ナカル可シ

○第二款 陪審ヲ撰ム事及ヒ之ヲ呼

集ムル事

第三百九十三條 〔千八百五十三年六月四日左

ノ如ク改ム〕嘗テ裁判言渡ノ為ノ定メ置キタ

ル期日ニ至リ不在又ハ其他ノ原由ニテ陪審

ノ數三十員以下ニ至ル時ハ陪審補員中ヨリ

其姓名ヲ記入シタル順序ニ從ヒ其數ヲ補フ

テ之ヲ三十員ニ充タシム可シ若シ又其補員

ニテ猶三十員ニ充タシムルニ足ラサル時ハ

裁判所吟味ノ席ニテ別段ノ姓名目録中ヨリ

關引ニテ陪審ヲ撰ミ其陪審ヲ以テ三十員ニ

充タシム可ク猶未タ足ラサル時ハ一年分ノ

陪審全員目録中ヨリ之ヲ撰ミ其數ニ充タシ

ム可シ

千八百十年七月五日ノ命令書第九十條ニ記

スル場合ニ於テハ裁判所吟味ノ席ニテ一年
分ノ陪審全頁目錄中ヨリ闡引ニ為シ其三十
頁ノ數ニ充タシム可シ

第三百九十四條 決斷ヲ為ス可キ陪審ハ必ス
十二頁ニ下ル可カラス

罪犯ノ吟味速ニ終ル可カラサル模様ナル時
ハ重罪裁判所ニテ陪審ノ姓名ヲ闡引ニ為ス
前ニ十二頁ノ陪審定頁ノ外別ニ一二名ヲ撰
ミ之ヲシテ吟味ニ立會ハシムルヲ言渡ス
ヲ得可シ

其十二名ノ中ニテ決斷ヲ為スニ至ル迄引續
キ吟味ノ席ニ出ツルヲ能ハサル者アル時ハ
其補頁別ニ撰ミタル者之ニ代ル可シ
其代ル可キ順序ハ嘗テ闡引ヲ為シタル時ノ
順序ニ從フ可シ

第三百九十五條 陪審ノ姓名目錄ハ十二名ノ
定頁ヲ撰ム前日ニ之ヲ各被告人ニ送ル可シ
若シ更ニ早ク之ヲ送り又ハ更ニ遅ク之ヲ送
ル時ハ其送達ノ効ナク並ニ其後ノ諸件ノ効
ナカル可シ

第三百九十六條 陪審呼出ヲ受ケテ出席セサル時ハ重罪裁判所ヨリ罰金ヲ言渡サル可シ但シ其罰金ハ

初犯ニ付テハ五百「フランク」

再犯ニ付テハ千「フランク」

三犯ニ付テハ千五百「フランク」

三犯ノ時ハ其者向後陪審タル可カラサルノ

言渡ヲ受ケ其者ノ費用ニテ其言渡書ヲ刊刷

シ之ヲ貼附ス可シ

第三百九十七條 嘗テ定メ置キタル期日ニ出

席スルヲ能ハサルノ證ヲ立テタル陪審ハ前條ノ例外ナリトス其辨解スル所ノ正當ナルヤ否ハ裁判所ニテ之ヲ裁判ス可シ

第三百九十八條 陪審出席ヲ為スト雖モ其職

ヲ為シ終ラサル中ニ正當ノ原由ナクシテ其

席ヲ退ク時ハ第三百九十六條ニ記スル所ノ

罰ヲ受ク可シ但シ其原由ノ正當ナルト否ト

ハ裁判所ニテ之ヲ裁判ス可シ

第三百九十九條 各罪犯ノ訴ニ付キ預定シタ

ル日ニ至リ吟味ノ席ヲ開ク前ニ陪審數員並ニ被告入及ヒ檢事長ノ面前ニ於テ各陪審ノ姓名ヲ呼上ク可シ但シ正當ノ理由アリテ出席セサル陪審又ハ出席スルヲ免レタル陪審條第三百八十三ノ姓名ハ之ヲ除ク可シ其呼上ニ答フル各陪審ノ姓名票ヲ壺中ニ入ル可シ

陪審ノ姓名票ヲ次第ニ壺中ヨリ取出スニ從ヒ最初ニ被告入又ハ其代言人ヨリ其陪審ヲ除去ス可キヲ述ヘ次ニ檢事長ヨリ其旨ヲ

述フ可シ但シ後ニ記スル定員十二員ニ至リテ其除去ノ申述ヲ止ム可シ

被告入又ハ其代言人及ヒ檢事長ハ陪審ヲ除去スルニ付テ、旨趣ヲ述フ可カラズ

斯ノ如ク除去ノ申立ヲ為サシメタル上ニテ其申立ヲ受ケサル陪審十二員ノ姓名票壺中ヨリ出テタル時之ヲ決斷ヲ為ス陪審ト定ム可シ

第四百條 被告入並ニ檢事長ハ陪審十二員ノ姓名、殘ルニ至ル迄陪審ノ除去ヲ申立ル

ヲ得可シ

第四百一條 被告人ト檢察長トハ陪審ノ同一
ノ負數ヲ除去スルヲ得可シ若シ陪審ノ全
負奇數ナル時ハ被告人ノ陪審ヲ除去シ得可
キ負數檢察長ヨリモ更ニ一負多シトス

第二百二條 被告人數人アル時ハ互ニ協議シ
テ陪審ヲ除去シ又ハ各自ニ之ヲ除去スルヲ自
由ナリトス

此場合ニ於テハ前數條ニ從ヒ被告人一人ニ
テ除去シ得可キヨリ更ニ多數ヲ除去ス可カ

ラス

第四百三條 被告人數人其除去スルヲ協議
セサル時ハ各自之ヲ為スニ付キ其順序ヲ闡
引ニテ定ム可シ○此場合ニ於テハ其順序ニ
從ヒ一人ノ除去シタル陪審ハ即チ數人ノ除
去シタルモノトシ各其順序ニ從テ陪審ノ定
負ニ至ル迄ヲ除去スルヲ得可シ

第四百四條 又被告人數人ニテ陪審定負ノ中
一部ヲ協議シテ除去シ他ノ一部ヲ各自ニ其
闡引ノ順序ニ從ヒ除去スルヲ得可シ

第四百五條 十二頁ノ陪審定リタル後直チニ
被告人ノ吟味ニ取掛ル可シ

第四百六條 何事ニ因ラヌ事故アリテ告訴狀

ニ記スル罪犯ニ付キ被告人ノ吟味ヲ為ス

ヲ裁判所ノ次ノ會議ノ日迄延ハシタル時ハ

更ニ改メテ陪審ノ姓名書ヲ造リ且前數條ニ

記スル如ク更ニ其除去ヲ為シ十二頁ノ陪審

ヲ定ム可シ若シ此手續ヲ為サ、ル時ハ其決

斷ノ効ナカル可シ

佛蘭西治罪法三終

辻 士 革 校

